

## 中学生の部

### 最優秀賞

神奈川県知事賞

#### おっちゃん和我

逗子市立久木中学校

二年 木戸 沙奈

「これからはおっちゃんって呼んでな。」私がおっちゃんとお会ったのは横断歩道です。歩行者信号が青になっていながらもかかわらず信号待ちをして立ち止まっているおじさんがいました。「渡るのかな、渡らないのかな。」気になってよく見てみると手には白杖がありました。青なのに車が通っていないなかったため車が止まる気配を感じることができず、渡るタイミングが分からなかったのです。この辺は街中ではないため音の出る信号ではありませんでした。私は最初声をかけようか正直、迷いました。「声をかけよう。」そう思って私はおっちゃんの肩をたたきました。「信号渡りますか。」緊張しました。でもおっちゃんは普通に、まず挨拶

をしてくれました。あ、大阪弁……。この辺では聞き慣れないので、ちよつと意外な気もしましたが、父が大阪出身の私にとつては、とてもなじみのある響きでした。私は少し肩の力が抜けました。氣づいたら、まだ青信号だったので、私は「今、信号が青なので渡りましょう。」と言いました。私は初めて目が見えない人と腕を組んで歩きました。前に習った目の不自由な人と歩く時は、ということを思い出しながら。渡り終えておっちゃんは私にお礼を言いました。その時、私はなぜか気持ちがすっきりしました。その後さらに私はおっちゃんとコンビニまで歩きました。途中、「今この前を通っています。」と報告しながら歩きました。これは小学校の時習ったので、今それを生かした！とうれしくなりました。私はおっちゃんとスピードを合わせながらゆつくり歩きました。それでもおっちゃんは「ああ、こんなに速く歩けるんや。うれしいわ。」と言ったので、私は「あ…そうか。」と思いました。

私も一度目隠しをして歩く体験をしました。目の前に実際はない電柱にぶつかりそうになるのが怖くて一歩一歩進むのが想像以上に大変だったのを思い出しました。

私はそれからおっちゃんを見かけたら声をかけるようになりました。私とおっちゃんはいつも歩く時いろいろな話をします。その中で私が心に残ったことは二つあります。

ある時おっちゃんは言いました。「でも、おっちゃんは幸せなんやで。だって普通おじさんと女の子が腕組んで歩いたりしないやろ。せやから目が見えなくなるつちゅうのは、悪いことばかりやないんよ。見方を変えるつちゅうのが大切なんやね。」私は目が見えなくなつてもそう考えるおっちゃんは、すごいと思いました。私だったら途方に暮れ、きつと外にも出ら

れなくなると思ったからです。それを聞いてからは、どんなに自分にとって嫌なことでも見方を変えて、プラスにしようと思うようになりました。

二つ目は「やって無駄なことはない。」ということ。おっちゃんが、目が見える時にしてきたこと。それは決して無駄ではなかった、とおっちゃんは振り返ってみてそう言いました。つまり無駄な努力などない、ということ。また努力は貯金できるとも言っていました。目に見えなくても着実にたまっていく。だからこれからも頑張つてな。その言葉は私の心にとっても響きました。

私はおっちゃんに出会って思ったことがあります。それは周りの大人はおっちゃんのことが見えているのにほぼ100%素通りしているということ。大人が助けている暇がないのも理解できます。関わらなくて済むことにわざわざ関わらないのが普通であり、スマートな生き方とされているのかもしれない。でもそうやってずっと見えていても見えないふりを続けていたら、本当に見えなくなってしまうのでは、と私は思うのです。大人になると、心の視力が落ちるのです。

私は声を掛けるちよつとの勇気で人一人と知り合うことができました。出会いは人生の宝だと私は思っています。私はほんの少しだけ、おっちゃんの役に立てたかもしれない。でもそれ以上におっちゃんは今まで私が考えてもみなかったことや知らなかったことを、たくさん教えてくれました。今は何事にもまず挑戦し、努力をし、いろいろな見方をもった人になりたいと思っています。そしてこれからも心の目をしっかり開いて生きていきたいです。